ベッドには、患部を洗い流すための流し台が設置されている。患者は移動しなくて良いため、スムーズな診療ができる

医療ジャーナリスト
伊藤隼也が行く！
ニッポンの医療現場 第3回

消毒液を使ってはいけない

ケガの治療法が変わった！痛まず、早く、きれいに治す「新常識」

ケガの手当と聞いて、多くの人が思い浮かべるのが「まずは消毒を!」。どの家庭にも一つは消毒薬の類が置いてあることだろう。傷口の消毒は19世紀から行われており、医学界の常識となっているが、この常識を真っ向から覆す全く新しい治療法が、今、注目を集めている。

常識を覆す 消毒をしないケガの治療

突然だが、あなたは擦り傷や切り傷などのケガをしたとき、どのような処置をしているだろうか？

①止血処理などをして傷口を消毒薬で消毒。
②傷薬などを塗ってガーゼを当てて保護する。
③かさぶたが出来たら剥がさずにそのまま放置。

ケガが長引いたら、毎日痛い思いでガーゼを剥がして傷口を消毒し、抗生剤軟膏や傷薬を塗布してガーゼを当てる、という繰り返し。多くの病院・診療所でも、このような方法が基本だ。しかし、実はこれらの方法は全てが間違いだったのだ。

驚くべきことに、最新の治療法では、「消毒しない」「傷口を乾燥させない」「消毒薬を含む薬剤を絶対に使用しない」というのだ。その治療法は「湿潤療法」といい、治療に用いるのは、水と被覆材だけだ。それでいて、従来より早く、きれいに治り、また何よりも痛みがほとんどない。これまでの常識を真っ向から覆す、画期的な治療法として注目を集めている。

いとうしゅんや●医療ジャーナリスト・写真家　国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.tv/

転載・二次使用禁止

注目を集めている。

にわかには信じがたい話だが、まずはそのメカニズムについて説明しよう。そもそも、なぜ消毒をしてはいけないのか。それは、消毒薬は細菌の細胞膜を壊すことで細菌を殺しているが、この作用が細菌だけでなく人間の細胞までをも破壊してしまい、傷の治りが遅くなってしまうためだ。さらにいえば、実は消毒薬では細菌はそれほど死滅しない。これでは消毒をする意味がないではないか。幼い頃、痛みを我慢して消毒をしたのは一体何だったのか……。

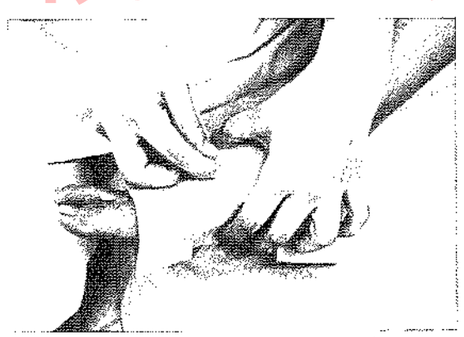
写真左が治療前、右が治療後の写真。きれいに傷が治っていることがわかる

診察時間はわずか5分 治療法は至ってシンプル

一方、湿潤療法では傷口を消毒せず、まず周辺の汚れや化膿の原因となる異物を水で洗い流す。その後、傷口を乾燥させないように被覆材で覆う。これだけである。傷口は、細胞から分泌される滲出液の働きによって修復される。滲出液とは、ケガをしたときに出る、傷口のジュクジュクの液体のことだ。この中には、細胞の分裂や成長を活性化させる物質（細胞成長因子）が含まれており、患部を被覆材で覆い、滲出液を外に逃がさないようにすることで、この自然治癒力を最大限に引き出すことができるのだ。

実際の治療の様子を見学するため、湿潤療法の生みの親である、石岡第一病院傷の治療センター長の夏井睦医師の元を訪ねた。

診察室では、始めに夏井医師が患者を問診し、症状の状態を確認する。ここまでは従来の診察と変わりはない。その後、看護師が古い被覆材をはがし、患部を水道水で洗うのだが、なんと、この診察室には患者が座る椅子のすぐそばに、流し台が設置されている。流し台は、足も洗えるように低い位置に設置されており、シャワーまで付いている。これなら、患部を洗うためにわざわざ移動をする必要もなく、診察もスムーズだ。丁寧に洗った後は、水滴を拭き取り、新しい被覆材を患部に貼り付けて、診察は終了。これでおわり？　と思うほど、シンプルな処置だった。



傷口を覆う被覆材には、傷にくっつかず、滲出液を逃がさず、ある程度の吸水性があるものが使われる

患者は、治療法について初診時に夏井医師から説明がされており、何よりその効果を身をもって体感しているため、不安を持つことはないようだ。この日は様々な患部と症状の患者が受診をしていたが、いずれも5分程度の診察で、消毒やガーゼを剥がすときのように、痛みをこらえている様子の患者は一人もいなかった。

古い慣習にとらわれず 患者のためになる治療を

夏井医師によると、とある大学病院で「これは入院して手術しないと治らない」と宣言された重症のヤケドが、湿潤療法に切り替えたところ、2週間の外来通院のみで完治した例もあるという。

このようにヤケドやケガにも画期的な治療法である湿潤療法だが、夏井医師のホームページ「新しい創傷治療」によると、湿潤療法を取り入れている全国の医療機関457施設のうち（2010年1月13日現在）、その大半は個人病院か小規模病院である。大病院の医師や形成外科医の中には、未だに湿潤療法を否定する医師が多いという。旧態然とした、消毒薬をたくさん使う方法が慣習化しており、新しい治療法を受け入れることができないようだ。

天動説を信じた科学者たちが自説を曲げずに生涯を終えたように、消毒薬を使い続けている医療現場の転換には相当な時間がかかりそうだ。

しかし、患者にとって一番大切なのは、目の前の医師がいかに科学的で根拠ある治療を行ってくれるかに尽きる。これは、湿潤療法のみならず、日々進化する医療の全ての分野にいえるということを覚えておきたい。

写真／SHUNYA ITO©　文／伊藤隼也・松本緒治　協力／石岡第一病院　「新しい創傷治療」http://www.wound-treatment.jp/